

病態生理と神経解剖からアプローチする

レジデントのための神経診療

監修：塩尻 俊明

執筆：杉田 陽一郎



評者

江原 淳 東京ベイ・浦安市川医療センター総合内科部長

神経診療を学ぶ初期研修・内科専攻医へ。通読の上、随時参照を勧めます

神経診療は難しく、苦手意識のある医師は多い。

なぜ難しく苦手と感じるのか。一つに、神経領域の幅広さがあると思う。解剖学的にも、脳、脊髄、末梢神経、神経筋接合部、筋などと多彩であり、病態的にも血管障害、感染症、自己免疫、変性など幅が広く、その組み合わせで膨大な疾患が存在する。誰しもその疾患数や領域の広さに圧倒され、特に神経内科を専門領域とするもの以外にとってこれを全て勉強しきことは無理だ、専門科に任せようという気持ちになるのもわからなくはない。

ただ一方で、救急外来で、一般内科外来に、脳卒中や意識障害、痺れの患者は受診するものであり、全てを神経専門家にコンサルトすることは現実的でなく、非専門医もそうした患者のマネジメントを適切に行えねばならない。

著者の杉田陽一郎医師は、2022年より神経内科の一人医長として東京ベイ・浦安市川医療センターに着任された。エビデンスに基づいた豊富な知識をもとに内科専攻医や研修医に対して熱心に神経診療を教育してくれ、病院全体の神経診療のスキルアップに多大な貢献をされ今ではなくてはならない存在となっている。本書にはまさに、彼が日々実践、教育されている神経内科診療のエッセンスがまとめられている。第1章の「神経診療の基本」では病歴と診察から病巣と機序を掴む、という最も重要な基本技術について丁寧に解説されている。非専門医であっても、できる限りその基本技術を習得してほしい、自身で診断仮説をもった上で専門医にコンサルトしてほしい、という強い想いが伝わる内容であると思う。

第2章では、運動、感覚の障害について病巣ごとの特徴がまとめられている。特筆すべきは、オリジナルのイラストやたとえなどを

豊富に用いて、わかりやすく解説されている点である。神経内科は総論である神経解剖や診察方法を習得しないと鑑別に進めないが、この部分でつまづかないよう（習得を諦めてしまわないよう）、大変に工夫されている。

第3章では、意識障害、けいれん、脳梗塞、頭痛、髄膜炎など神経領域で多く遭遇する病態、疾患について標準的な診療手順ついて解説している。同じく、豊富なイラスト、表でわかりやすく記述されている一方で、いずれも多数の国際的なレビュー論文やガイドラインを参照されており、一つひとつの章が非常に優れたレビューとなっていて指導医レベルが読んだとしても勉強になる内容である。

また、合間に臨床に役立つクリニカルパタールが随所に散りばめられている点も秀逸である（例：先行感染＋蛋白細胞解離＝ギランバレー症候群、などキーワードから診断しようとする）と誤診する、神経救急では脳を見たら心臓を見るなど）。

本書はまさに神経診療のエッセンスを臨床現場のGeneralistへ届ける、最適な本だと感じている。初期研修医や内科専攻医が「神経診療」を学ぶための最初の一冊として、強くお勧めしたい。豊富な内容ながら読みやすく工夫されており、ぜひ通読した上で、さらに当該の疾患や病態を経験したときにもう一度そこを読み直す、というように深く愛用していただくのが良いのではないかと思う。評者自身は卒後16年目の総合内科医師ではあるが、通読用の書籍版と病棟普段使いの電子書籍版双方を活用しており、すでにベッドサイド教育の心強い相棒となっている。

